

大林守・商学部教授が イタリア訪問

「シエナの元気の源は 伝統ある『町内会』の連帯」 全国紙のコラムに登場



大林教授が登場した伊紙「La Nazione」

大林守商学部教授(計量経済学、国際交流センター長)が、今夏、イタリア中部の都市シエナを訪問。全国紙「La Nazione」のインタビューを受け、9月4日の同紙コラム「BUONGIORNO SIENA」に登場、紙面を飾った。

大林教授は、シエナの人口は6万弱、にもかかわらず、数百年にわたって都市として発展を維持してきたのは、コントラダと呼ばれる街区町内会のコミュニティを基盤とした社会関係資本(信頼、連帯)の存在が挙げられる。その力は、中小企業の発展にも役立つ」と語っている。



コントラダではたくさんのイベントが行われ人々の交流の場に=シエナで

ゆかりの大漁旗掲げ 励ましの太鼓を披露

専大松戸中・ 高校和太鼓部 被災地・大槌町を訪問



大槌の仮設住宅前で力強い太鼓を披露

創部20年の同部が演奏の際、掲げるのは大槌の「第十金祐丸」の大漁旗。4年前、岩手県の総合マリリンジャー団体「海遊学院」から提供された。3月11日の大震災の報に「演奏会で大槌の人々を激励しよう」と企画した。

9月28日夜、バスで出た一行34人は、翌29日、大槌町災害ボランティアセンターで清掃、草刈り活動を行った後、岩手県立大槌高校へ。集まった。

学生部「夏期石巻ボランティア活動」報告会

「まだできることはある」 「災害に備え心構え大切」

学生部主催「夏期石巻ボランティア活動」(A日程)8月6〜9日、B日程)9〜12日(本紙492号既報)の参加者による活動報告会が9月24日、神田キャンパスで開催された。学生、教職員ら30人が出席し、活動内容や現地を感じたことなどを発表した。

部長が「この活動は長くボランティア活動(継続)していかねばならないもので、参加した皆さんの意見や感想を今後に生かしたい」と趣旨を説明。続いて参加学生一人ひとりが参加のきっかけや感想を報告した。

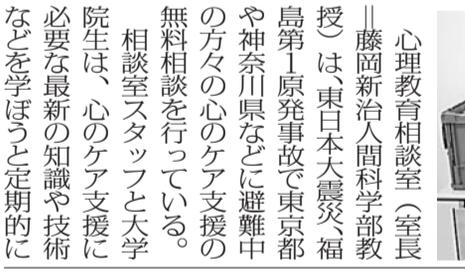
「まだできることはある」という意見が出た。B日程は集められた泥やがれきなどを土のう袋に詰める作業を担当。両日程に参加したSKV(専修生田ボランティア)の活動が紹介され、参加者を募った。



神田キャンパスで開かれた活動報告会



出発前大漁旗を持って



被災地への支援物資続々
衣類、玩具、寝具... 心理教育相談室



24人の参加者らが記念撮影

24人が12週間「日本」を学ぶ
国際交流協定校の米ネブラスカ、オレゴン両大... 秋期日本語・日本事情プログラム

●新連載● 外国語のススメ LL研究室

英語 "How to die is how to live"
小山 太一 商学部准教授
時は秋。もう少したてば、色づいた木々が最後のお祭りのように野山を染め、そして落葉から冬枯れへと季節は移っていきます。それだからというわけでもないですが、イギリスの著名小説家であるイアン・マキューアン(『贖罪』新潮文庫、『ソーラー』新潮社ほか)が今年初めに人間の死の方について行った提言を思い出しました。大震災このかた、人の死について考える機会が多い年でもありましたし、ひとつその話をしましょう。

心理教育相談室(室長 藤岡新治人間科学部教授)は、東日本大震災、福島第一原発事故で東京都や神奈川県などに避難中の方々の心のケア支援の無料相談を行っている。相談室スタッフと大学院生は、心のケア支援に必要な最新の知識や技術などを学ぼうと定期的に...

「秋期日本語・日本事情プログラム」スタート
「秋期日本語・日本事情プログラム」および「日本理解プログラム(BCCLプログラム)」が9月22日からスタートした。